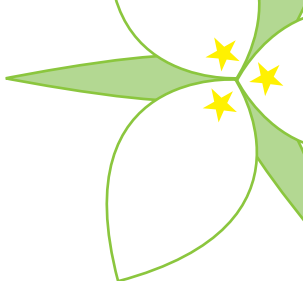




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スポーツ、ツーリズム、文化の3要素の新結合による地域活性化戦略：釧路市阿寒湖温泉における釧路市国設阿寒湖畔スキー場をめぐる地域活動の研究
Author(s)	臼井, 冬彦
Citation	観光創造研究, 3, 1-21
Issue Date	2008-10-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34881
Type	departmental bulletin paper
File Information	20081016KankousouzoukenkyuNo.3.pdf





Advanced Tourism Studies No.3

観光創造研究

《研究調査報告》

スポーツ、ツーリズム、文化の3要素の

新結合による地域活性化戦略

釧路市阿寒湖温泉における釧路市国設阿寒湖畔スキー場
をめぐる地域活動の研究

Regional Revitalization Strategy

by Synthesizing Three Factors; Sports, Tourism and Culture

A Study of Regional Activities around Kokusetsu Akan Lakeside Ski Area
at Lake Akan Hot Springs

臼井冬彦

Fuyuhiko USUI

Center for Advanced Tourism Studies
Hokkaido University

北海道大学 観光学高等研究センター



観光創造研究 No. 3《研究調査報告》

2008 年 10 月 16 日

Advanced Tourism Studies No.3

10/16/2008

スポーツ、ツーリズム、文化の 3 要素の 新結合による地域活性化戦略

釧路市阿寒湖温泉における
釧路市国設阿寒湖畔スキー場をめぐる地域活動の研究

Regional Revitalization Strategy by Synthesizing Three Factors; Sports, Tourism and Culture

A Study of Regional Activities around Kokusetsu Akan Lakeside Ski Area at Lake Akan Hot
Springs

臼井冬彦
北海道大学大学院
国際広報メディア・観光創造専攻修士課程

Fuyuhiko Usui
Master student
Graduate School of International Media, Communication, and Tourism Studies
Hokkaido University

【要旨】

「スポーツ」、「ツーリズム」、「文化」は、その各々が地域活性化の資源の一つとして、各地で有効な活用策が活発に議論されている。一方、バブル崩壊後、日本におけるスキー場の経営は全国的にますます厳しいものとなってきている。さらに、バブル期に大規模開発されたスキーリゾートにもまして、町のスキー場として発展してきた小規模なスキー場の単独での存続は、各地のひっ迫する財政状況も加え、より一層難しい状況となってきている。そういう中で、スポーツ、ツーリズム、文化という3要素を有機的に結び付けることで、将来に向けてのまちづくりの活動を開始している地域も現れてきている。北海道釧路市阿寒町の阿寒湖温泉は、古くから道東の一大温泉観光地であるとともに、冬季の阿寒湖の氷上の活動をプロモーションしてきたが、2007年度からさらに地域にある小規模なスキー場も含めた「冬の遊び場」としての阿寒湖温泉のポジショニングを行おうとしている。本稿では、これらの背景となるデータの収集と住民ヒアリングを行うとともに、スポーツ、ツーリズムと文化をむすびつけた現在の活動が、地域内でどのような影響を与えつつあるかを検証し、3つの要素を新たな時代のベクトルで結びなおすことで、地域経済再生へのツーリズム・イノベーションを図る戦略について論述したい。

キーワード： スポーツ、ツーリズム、文化、阿寒湖温泉、釧路市国設阿寒湖畔スキー場、ツーリズム・イノベーション、地域活性化戦略

【Abstract】

Sport, tourism and culture are respectively discussed in many regions as vehicles for revitalizing local society. On the other hand, ski resort has been financially struggling specifically since the burst of so-called bubble economy. Especially, small-scale ski areas, which were originally developed for local society, have had difficulties in economic viability. In these circumstances, there appear some areas trying to synthesize three factors such as “Sports”, “Tourism” and “Culture” to design future direction of the region. “Akan-ko” (Lake Akan), Kushiro-city, Hokkaido, traditionally renowned for large-scale hot springs and various activities on ice, is reviewed as an example. Local people have just started to re-position the area with the new message “Playground in Winter” by including small local ski area. In this study, the background and current efforts at Lake Akan Hot Springs are examined with historical data and interviews. Finally, strategies for regional revitalization through tourism innovation are discussed by synthesizing three factors; sport, tourism and culture.

Key-phrases: Sports, Tourism, Culture, Lake Akan Hot Springs, Kokusetsu Akan Lakeside Ski Area, Tourism Innovation, Regional Revitalization

はじめに：研究の背景、目的

日本におけるスキー場の経営は日本人のスキー離れの状況もあり、全国的に厳しいものとなってきている。バブル期に大規模開発されたスキーリゾートにもまして、町のスキー場として発展してきた小規模なスキー場の単独での存続は、各地のひっ迫する財政状況も加え、より一層難しい状況となってきている。一方、スポーツツーリズムの観点から、スポーツを観光資源として取り上げ、地域の活性化を図ろうという試みも活発化している。

スポーツツーリズムの観点からは、オリンピックや FIFA ワールドカップのような大規模なスポーツイベント・大規模施設における観光インパクトなどの研究と地域での実践活動が進んでいるが¹、残念ながらこのような大規模イベント・施設を前提にした地域の活性化対策が検討できる地域は限られているのが実情である。

本稿では、大規模イベント・大規模施設に依存しない、地域住民のための小規模な地域資源としてのスポーツ施設を再評価し、「スポーツ」、「ツーリズム」、「文化」という地域の 3 要素を有機的に結び付けることで²、将来に向けてのまちづくりの活動を開始した地域の試みに焦点をあてる。

北海道釧路市阿寒町の阿寒湖温泉は、従来、一大温泉地であるとともに冬季の阿寒湖の氷上の活動を中心に観光集客を行ってきた。2007 年度からは地域住民の利用を中心とした小規模な釧路市国設阿寒湖畔スキー場も含めた「冬の遊び場」³としての阿寒湖温泉の新しい活動を展開している。本調査・研究では、この取り組みに至る背景、経緯を釧路市阿寒町所有の各種データと関係者のヒアリングを中心にして分析するとともに、1 年間の活動を通じて起きている変化をもとに、3 つの要素の有機的展開が及ぼす影響、並びに相乗効果について論述したい。そのうえで、スポーツ、ツーリズムと文化をむすびつけた地域の活動が、地域内でどのような影響を与えつつあるかを検証し、3 つの要素を新たな時代のベクトルで結びなおすことで、地域経済再生へのツーリズム・イノベーションを図る戦略について言及する。

従来の活動と新しい活動とを区別するために、本稿では、従来の活動を「観光」と表し、2007 年度からの新しい方向性を示唆する活動を「ツーリズム」と表現する。また、本稿の中で使用される阿寒町関係の H P の資料・地図並びにデータの使用に関しては、釧路市並びに阿寒観光協会の許可を得ていることを記しておく。

¹ 2002 年の日韓共催の F I F A ワールドカップの開催に向けて、1993 年に国内開催都市候補地として 15 ヶ所の地域が積極的に招致合戦を繰り広げた。その結果、札幌市・宮城県・茨城県・埼玉県・横浜市・新潟県・静岡県・大阪市・神戸市・大分県の 10 ヶ所が開催地として選定された。これらの地域の開催地における事後の評価に関しては、独立行政法人経済産業研究所による「W杯開催後の事後検証-開催を契機にした地域振興」(2003)を参照。さらに大会前からのキャンプ地として、約 70 の市町村が立候補し、積極的な誘致合戦が展開され、23 の自治体が決定されたことは記憶に新しい。

² より大規模な都市のレベルでは、2001 年の第 1 回スポーツ・ツーリズム世界会議のオープニング・セレモニーの基調講演において、当時のスペインのバルセロナ市長であった Joan Clos が、スポーツとツーリズムと文化の 3 つの組み合わせが、将来に向けてのウイニング・コンビネーションだ」と演説を行ったことは特筆される。Sports and Tourism 2001, p. 63。

³ 国設阿寒湖畔スキー場の表現として、『「冬の遊び場」としてのスキー場』というフレーズが公にはじめて発表されたのは、国土交通省・北海道運輸局の第 4 回スキー場活性化委員会(2007. 9. 19)においてである。

保有する観光関係並びにスキー場運営に関する詳細なデータの収集・分析を行うとともに、スキー場運営上の問題点とツーリズムとの関係を考察した。そのうえで、釧路市のスキー場関係者、観光関係者のインタビューを通じ、地域活性化のプログラムの中でのスキー場の従来の位置づけ、新しい方針でのスキー場のあり方を議論した。その後、収集したデータの整理・分析とともに、考えられる諸策のまとめを協力いただいた関係者に送付した。これらの調査データ・まとめを元に北海道運輸局による指導もあり、阿寒湖温泉関係者によって 2007 年冬季に様々な新しいプログラムが実施された⁹。

2008 年 9 月に、再度現地での調査を行い、追加データの収集と分析、関係者へのヒアリングを通じ、新しい方針・試みが、スキー場運営のみならず、地域住民に与えつつあるさまざまな影響について考察を行った。これらの調査・考察をもとに、スキー場を中心にした活性化策のうえで、スポーツ、ツーリズム、文化の 3 要素の有機的な新結合が、地域に起こしえる影響について論述する。なお、ヒアリングを実施した調査対象者については、末尾にその組織名のみを記し、個人名を記さない形とした。

2. 阿寒湖温泉の状況

阿寒湖温泉が、この新しい方向に舵を切った背景を理解するために、阿寒湖温泉地区の全体の状況を説明する。この説明のためのデータに関しては、当時の状況を判断するために、意識的に 2007 年春先までのデータを使用する。最新の数字が必要と判断した場合は、欄外の注で説明することとする。

2.1. 釧路市国設阿寒湖畔スキー場の状況

釧路市国設阿寒湖畔スキー場に関する状況を見てみる。

2.1.1. スキー場概要

釧路市国設阿寒湖畔スキー場は、1980 年 1 月に開設されて以来、住民の冬の活動の場として旧阿寒町により運営されてきた¹⁰。1987 年に人口降雪機を導入し、F I S 公認のスキー大会を開催し続け、2008 年で 21 回目を迎える。北海道の中でも、寒さの厳しい地域にあり、冬のスキーシーズンのいちばん早い時期に合宿のできるスキー場として定評がある。冬季の厳しい気温と比較的少ない降雪量のため、パウダースノーではあるが、バーンは固めと言われている。阿寒湖温泉のホテル街からは車で 10 分ほどの距離にあり、阿寒湖温泉の観光スポットとは、きわめて近いロケーションにある。

⁹ 後述の 4.5. 冬の遊び場のための具体的な活動参照。

¹⁰ 地元で生まれ育った住民の話によれば、リフトが設置される以前から、住民がスキーを楽しんでいたスキー場である。遊び終わればスキーを履いたままで、家まで滑って帰ったとのことで、リゾートとしてのスキー場ではなく、住民のための遊び場であった。

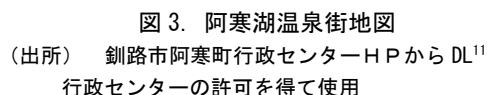


図4. 国設阿寒湖畔スキー場レイアウト
(出所) 2007年8月現地調査の上筆者作成

図 5. に示すように、リフトの輸送人員は昭和 62 年（1987 年）時の 40% 近くにまで落ち込んでいるが、ここ 5、6 年は 19—20 万人前後で推移している。経営的には、地域住民のための福祉施設という性格もあり、開設以来、スキー場運営での黒字化はできておらず、財政悪化のなかで、市による運営が負担になりつつある。スキー場での収入は策道事業と呼ばれるリフト収入、レストラン収入が主なものであるが、委託のレストラン事業も含めたスキー場単独での黒字化には、損益計算上、2006 年時の倍近い売り上げが必要と言われ

<http://www.city.kushiro.hokkaido.jp/www/contents/1185434622344/html/common/other/47f4735e008.jp>
pg (2008. 10. 2. アクセス)。

ており¹²、スキー場単独での経営黒字化は極めて難しい状況にあると言える¹³。

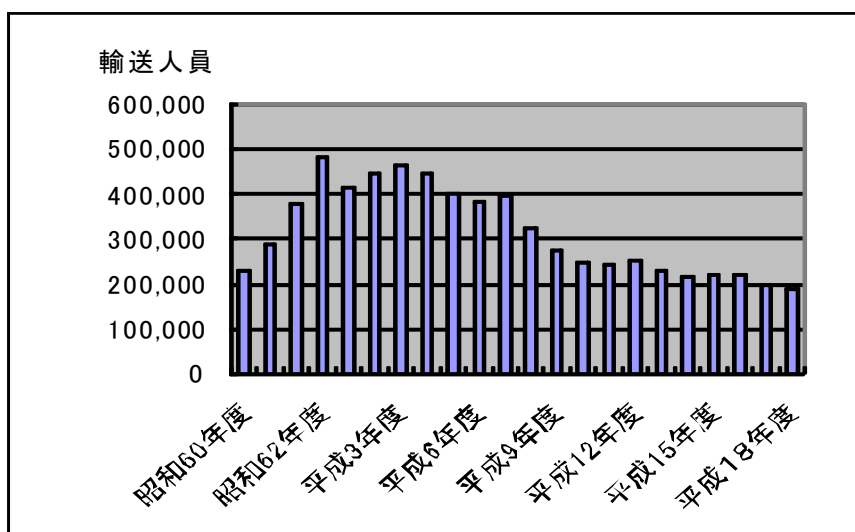


図5. 国設阿寒湖畔スキー場 輸送人員（リフト）
（出所）釧路市阿寒町行政センターデータに基づき筆者作成

2.1.3. スキー場の特徴

リフトが一本だけの小規模なスキー場であり、スキー場を中心にした本格的なスキーリゾートとしてのシナリオを検討するのが困難な状況ではあるが、釧路市国設阿寒湖畔スキー場はいくつかの際立った特徴を備えている。

(1) 競技スキー場としての性格

日本のスキーシーズンにおいて、一番早い時期に大会が開催できるスキー場として定着している。1987年に人口降雪機を導入し、FIS公認のスキー大会を開催し続け、2008年で21回目を迎える。12月後半の大会に合わせ、12月中に全国から多くのスキー連盟、スキー部が合宿に訪れている。彼らは釧路市国設阿寒湖畔スキー場での合宿を12月に完了し、その後海外を含めたより大規模なスキー場に移動していくため、1月以降は合宿人員が激減してしまう¹⁴。この結果、釧路市国設阿寒湖畔スキー場での合宿の80%は12月中に終わってしまう。2006年度における高校生、大学、社会人などの合宿は46チーム、1,100人を超える¹⁵。尚、各地のスキー連盟主催による小人のスキー合宿について言えば、2006年度は、30

¹² 釧路市阿寒行政センターヒアリング（2008年8月）。

¹³ この状況に関しては、阿寒湖温泉の他の主要なステークホルダーであるNPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構や宿泊業者も理解している。町全体での効果を出していかないと、財政的にスキー場の存続が厳しいことを認識している（2008年8月ヒアリング）。また、釧路市との合併後、それまで地元の阿寒町の小学生は無料で使用できたリフトについては、有料として町民の負担も増えている。

¹⁴ 例えば、2006年度（2006年12月～2007年3月）では、46チーム1,133人の合宿総人員であったが、12月31日までの人員が976人（86%）であり、1月以降は157人に過ぎない。

¹⁵ 前掲注参照。

チーム、約 218 人が参加している¹⁶。この意味では、釧路市国設阿寒湖畔スキー場は、日本の競技スキーの中でも、特別な存在と歴史を有したスキー場とも言える。

(2) 地元民のためのスキー場としての性格

温泉街の中心部から車で 10 分ほどの距離にあるため、もともとは、地元住民の楽しみの場としてのスキー場として親しまれてきた。また、地域のスキー場として小中学校のスキー研修の場としての利用も古くから行われている。旧阿寒町内での正規の学校のプログラムとしての利用者は、2006 年度で大人 89 人、小人約 287 人の実績となっているが¹⁷、これは、対象学校区の小、中、高校生徒数の約 40－50%程度になっている。北海道内におけるスキー研修の実施が年々下がっていく中で、地元住民の使用すらも低下してきていることを意味している。もう少し広いエリアでの地元民の利用ということでは、旧釧路市内のスキー研修がありうるが、同市内の小学校 34 校のうち 6 校、中学校 18 校中 5 校のみが、同市内に近い阿寒ロイヤルバレーでのスキー研修を行っている状況であり¹⁸、釧路市阿寒湖畔スキー場には直接的な貢献はない。

(3) 修学旅行先としてのスキー場

都会からの修学旅行生の受け入れも古くから行われているが、年々実施校、延べ人数ともに低下傾向である。1996 年度から 2003 年度においては、毎年 1,000 から 1,500 人程度の受け入れを行ってきたが、2006 年度では、3 校、延べ 415 人の受け入れに終わっている¹⁹。1996 年から 2006 年までの 11 年間で延べ 39 校、延べ一万人以上が修学旅行の一環として釧路市国設阿寒湖畔スキー場を利用しているが、そのうち 21 校が神奈川、9 行が東京からの修学旅行生である²⁰。

2.2. 阿寒湖温泉の観光状況

スキー場の状況だけではなく、阿寒湖温泉全体の年間を通しての観光客受け入れ状況について、市のデータをもとに説明を行う。

2.2.1. 全般

北海道の有数観光地としての阿寒湖温泉の観光入込状況を見てみると、ピーク時に比べ厳しい状況が続いていると言える。2006 年度の日帰り客数は 1988 年度の約 45%の落ち込み

¹⁶ 参加人員の多い順に 3 つのチームをあげると、ジャパーナスキーチーム、SKS Jr. レーシング、三笠レーシングであった。

¹⁷ 阿寒湖小学校 113 人、阿寒湖中学校 100 人など。

¹⁸ 釧路市阿寒町行政センターデータ。

¹⁹ 神戸工業高校、慶応高校、伊奈高校。2007 年度では、神戸工業高校、淡路高校（兵庫）、慶応高校、3 校で、延べ 473 人となっている。

²⁰ 同じ学校が違う年度に来た場合も 2 回として計算。東京、神奈川以外の他の地区からは、千葉 3、兵庫 3、茨城 1、大阪 1、北海道 1 となっている。

となっている（図 6）。宿泊数客においてもマイナス 19%となっており、全体を押し上げるための活動、ストーリー性、人を引き付けるための磁力を増進させる対策が必要な状況となっている。日本の各地の伝統的な大規模温泉観光地と同様の苦しみを阿寒湖温泉も経験していると言える。

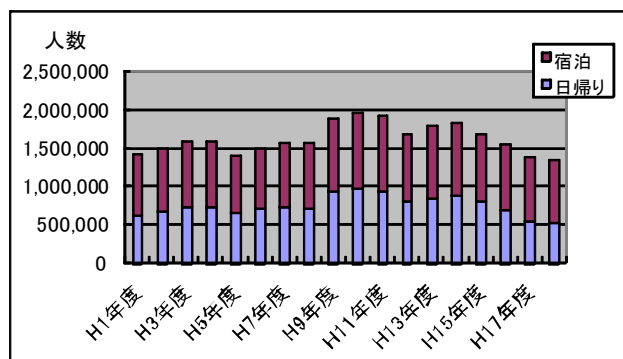


図6. 阿寒湖温泉 観光客入込数推移
（出所）釧路市阿寒町行政センターデータに基づき筆者作成

2.2.2. 季節性

阿寒湖温泉の観光客の特徴を見るうえで、季節性に注目してみると、興味深いデータが現れる。5 月から 10 月までの春・夏・秋シーズンの入込数とは別に、1 月～3 月の冬場の入込み数が健闘していることである。スキー利用客が少ない中で、冬場の入込み数が一定数起こっているのは偶然ではなく、地元民による長年の活動の努力が報われてきたものである。1 月下旬から 3 月にかけて、冬場の観光客対策と称して、湖の上での冬の活動を充実させ、それを国内外にプロモートしてきた長年の努力があるからである²¹。

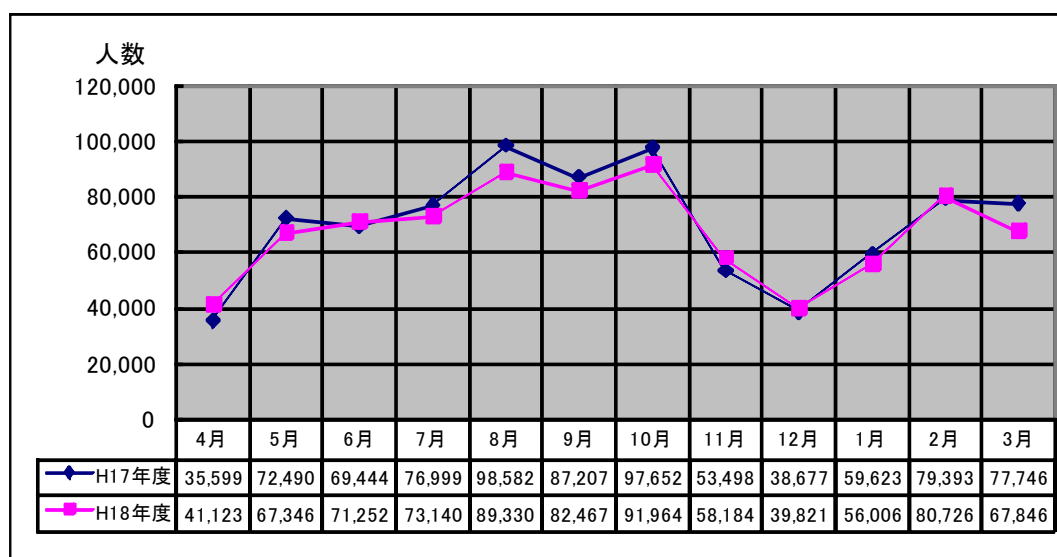


図 7. 阿寒湖温泉 月別宿泊のべ数
（出所）釧路市阿寒町行政センターデータに基づき筆者作成

2.2.3. あいすランド阿寒：氷上フェスティバル

もともとは、夏季に集中する観光客の冬場の誘客イベントとして、阿寒観光協会が企画・実施してきたもので、すでに 30 年の歴史を有する。この間、日本国内でのプロモーション

²¹ 台湾に対するプロモーションは氷の上のプログラムの開始時期にまでさかのぼり（約 30 年前）、宿泊業者が自ら台湾まで出向き積極的に PR を行った（行政センター、観光協会ヒアリング）。

だけでなく、台湾を中心にした海外へのプロモーションも実施してきている²²。湖畔に並び立つ観光ホテルからも氷上の活動が臨めるもので、アイススケート、スノーモビル、4輪バギー、バナナボート、歩くスキー、ワカサギ釣り、引っかけ釣りの釣り堀など、氷の上で、子供から大人まで楽しめるプログラムを充実させている²³。また、午前・午後の内容だけでなく、夜の8時過ぎからは、氷上花火打ち上げなども実施しており、温泉旅行客を氷上の遊びに誘導する仕掛けを行っている。こうして定着した氷の上の活動に対して、関係者によれば、道内、道外、海外からの客が各々1/3ずつになっていると語られている²⁴。

しかしながら、これらの冬の遊び場としての阿寒湖氷上に比べ、釧路市国設阿寒湖畔スキー場への観光客の誘導活動は限られたものとなっていた。一部宿泊業者によるスキー合宿客への対応は以前から行われていたが、氷上の活動を楽しむ客とスキー客との接点が見えていない状況でもあった。阿寒湖畔エコミュージアムセンター²⁵の開設や（有）阿寒ネイチャーセンター²⁶などによる、歩くスキー、スノーシュー・トレッキングなどは開始されてからの歴史も浅く、これを主目的とした阿寒への冬の入込みは、きわめて限られている状況と言える。

2.3. 阿寒湖温泉の文化的背景

阿寒湖温泉は阿寒国立公園内に位置し、広大な国有林が存在する道東屈指の温泉観光地であるだけでなく、いくつかの文化的・歴史的位置づけを持った地域である。これまで、阿寒湖温泉は道東地区の観光における主要地域である、釧路、根室、知床、網走を経由するツアーの大量輸送客のための中継宿泊施設としての位置づけがされており²⁷、ツーリズム全般の活性化の中で、これらの総合資源の活用については、十分な活動がされているとはいえない状況である。この背景も含め、阿寒湖温泉地区の文化的側面について説明を加える。

2.3.1. 前田一步園財団による土地所有、温泉管理

温泉地として宿泊施設が立ち並ぶエリアを含め、阿寒湖を取り囲むように広がる広大な森林を始め、約3,900ヘクタールにおよぶ広大な面積が、前田一步園財団の所有にあり、温泉管理だけでなく、自然保護、森林管理がなされている。この前田一步園財団は日本に

²² 2005年度と2006年度の海外からの観光客の内訳は後述の図13を参照。

²³ 1月はじめから3月末まで日中8:00-17:30までは、「あいすランド阿寒」と呼ばれる本文中にある氷上での様々な活動が楽しめる。また、1月下旬から3月下旬の夜間には「氷上フェスティバル」と呼ばれる阿寒湖の氷上でミニセレモニーを実施し花火を打ち上げる。2月から3月上旬までは、あいすランド阿寒の活動が夜間も楽しめるようになっている。これらの活動により、氷上フェスティバルの夜間の参加者が年間5万人規模に達する冬の阿寒の名物の行事として定着している。

²⁴ 阿寒町行政センターヒアリング（2008年8月）。

²⁵ 阿寒湖畔エコミュージアムセンターは2002年に開設され、冬場の活動として阿寒湖畔キャンプ場周辺の森の散策や、ペンケトーへのスキーハイキングなどが開始された。

²⁶ （有）阿寒ネイチャーセンターでは、山岳ガイドの経験を生かし、夏のカヌー、ハイキング、冬のスノーシュー・トレッキングなどの活動をしているが、家族経営による小規模な展開がなされている。

²⁷ 阿寒観光協会ヒアリング（2008年9月）。

におけるナショナルトラストのパイオニアとも言える存在であり、1910年には、家訓において、「前田家の財産はすべて公共の財産となす」²⁸と定められ、1983年に財団化されて、現在も活動を続けている。

2.3.2 阿寒湖アイヌコタン、まりも祭り

阿寒湖温泉の観光資源の一つとして阿寒湖アイヌコタンがあげられる。もともと阿寒湖温泉には季節的な漁小屋を除いては、アイヌによる集落が形成されていたものではなく、1954年に前田一步園の三代目園主である前田光子による土地の無償供与により、点在していたアイヌの家屋が移住して形成されたものであるとされる²⁹。その少し前に当たる1950年には、「まりも祭り」³⁰が開始され、その後50年以上継続されている。当初、アイヌ文化の観光利用という批判が、他地区のアイヌをはじめ、学者からもあったようだが、主催するアイヌの人々にとっては、「神事であり、祭事」³¹であり、大自然への感謝祭であり、アイヌの伝統的送り儀礼の形式を取り入れて創られた新しい祭り(煎本 2001: 339)であるという評価を受けている。道東の観光を支えるとともにアイヌの伝統文化の伝承・保存の象徴的存在となっている。

2.4 地域におけるまちづくりの取組み：阿寒2010

一大温泉観光地としての阿寒湖温泉であるが、マス・ツーリズムに対応した観光地としての地位の低下傾向を認識し、NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構が推進母体となって「阿寒湖温泉再生プラン2010」³²という温泉街の再生活動を展開している。2002年に2010年を目標とした街づくり活動を策定し、その後3年ごとの見直しを図っているものである。カナダのブリティッシュ・コロンビア州ウィスラー市の住民参加のまちづくり活動である「Whistler 2020」³³を手本にしたまちづくり活動である。この活動の中でも、

²⁸ (財)前田一步園財団カタログ並びにHP <http://www.ippoen.or.jp/naritatsil.htm> (2008年9月17日アクセス)。前田一步園が財団法人化されたのが1983年であり、社団法人日本ナショナル・トラスト協会が設立されたのが1992年9月である。その前身である任意団体の「ナショナル・トラストを進める全国の会」が結成されたのが、1983年の2月である。(社団法人日本ナショナル・トラスト協会資料)

²⁹ 煎本(2001) p. 327。

³⁰ 現在は、主催／釧路市・阿寒観光協会・阿寒湖アイヌ協会、後援／釧路市教育委員会・特別天然記念物「阿寒湖のマリモ」保護会・阿寒湖漁業協同組合によって、毎年10月8日～10日の3日間行われている。阿寒観光協会HP参照、<http://www.lake-akan.com/event.html> (2008. 9. 18 アクセス))。阿寒湖だけでなく、十勝、日高、上川まで全道各地から多くのアイヌの人々が参加している(煎本(2001) p. 335)。

³¹ 平澤(2005) p. 101。

³² 2002年の3月に策定され、3年ごとに進捗状況が確認されている。2005年4月からの第二期計画では、美しい景観・優れた自然景観、情報発信、滞在が楽しい温泉地、商店街の活性化、自主的な取り組みの5点を基本戦略に置き、45のプロジェクトリスト、内7つの最重点プロジェクトを定め、さまざまな活動に取り組んでいる。「阿寒湖温泉再生プラン2010」第二期計画概要版。

³³ 夏冬の国際リゾートとして有名な住民人口約10,000人のウィスラー市(Whistler BC, CANADA)がMoving Toward a Sustainable Futureをキーワードに、行政、住民、企業の各種のステークホルダーを集め、積極的な情報公開のもとに進めている地域活動。地元住民の大多数が、観光関連業に直接・間接に関係している点で、阿寒湖温泉との類似性がある。

2006年までは、温泉街と阿寒湖、阿寒湖アイヌコタン、周辺の自然環境を観光資源として再生するための議論・活動が中心であり、釧路市国設阿寒湖畔スキー場に特別の視点を当てた活動はなされていなかった。2002年の計画時に目標とされた2010年の地域イメージは、『「こちよい湖畔、のんびり温泉 阿寒湖」～2泊3日できるレイクサイドリゾート～』³⁴であり、周囲の自然と一体となった、美しい庭園のような温泉街づくりをめざしていたが、スキー場を積極的に組み込んだ形での地域活動ではなかった。

3. 日本のスキー場の動向

釧路市阿寒湖温泉での最新の取り組み、特にスキー場を絡めた取り組みを検討する前に、日本全体と北海道におけるスキー場の状況について概観する。

3.1. 日本全体のスキー場利用状況

2007 レジャー白書のデータを使用して、日本全国でのスキー、スノーボードへの参加がどうなっているかを見てみる。

スキー参加人口の漸減傾向は止まらず、特に2002年以降での落ち込みがひどくなっている。スノーボードに関しては平成2001-2002年にピークを付けたが、その後は停滞しており、スキー客の落ち込みをカバーしきれておらず、スキー場への集客力が落ちたままとなっている。

スキーとスノーボードの参加率を性別・年代別にみると(図9、図10)、いくつかの顕著な特徴がみられる。全般の傾向としては、男性の方が女性よりも参加率が高い傾向となっている。女性の参加率をみると、10代では女性のスキーへの参加率が、男性との比較においても高いにもかかわらず、20代になるとスノーボードに転向してしまう。30代-40代では、これがまた逆転し、スキーへの

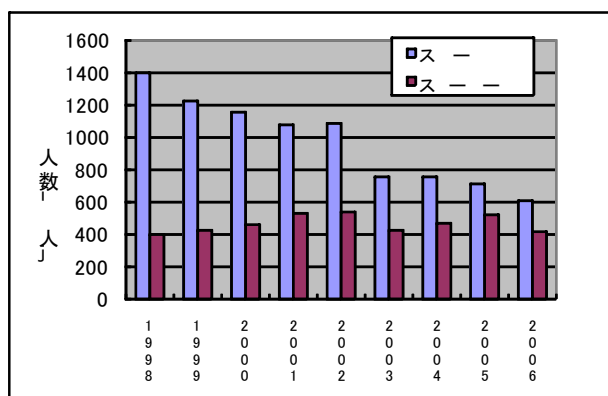


図8. 人員推移
(出所) レジャー 2007 p.42に基づき筆者作成

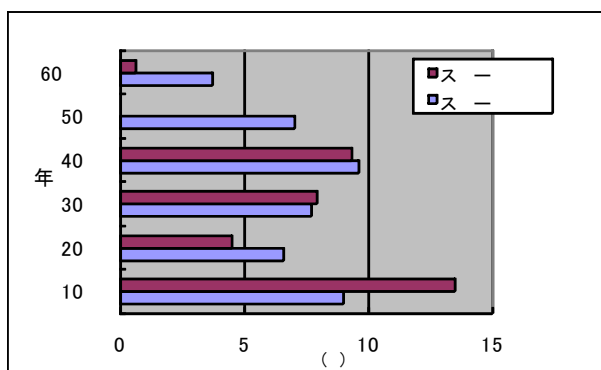


図9. 2006年スキー・スノーボードの参加率
(出所) レジャー 2007 p.21に基づき筆者作成

³⁴ 注32参照。

参加率の方が高くなっている。しかし50代以降では、スキー、スノーボードともに、女性は全く参加しない状況となってしまう。スノーボードが20代の男女、(特に女性)並びに、30代の男性に偏っているのに対し、スキーでは男性にとって50代でも比較的高い参加率を維持しており、息の長いスポーツとなっている。

これを参加希望率から現在の参加率を差し引いて、潜在的な需要ということではスキー並びにスノーボードへの関心がどうなっているかを説明すると(図11)、男性では、世代にかかわらず、スキーをしたいという潜在需要が存在していることがうかがえる。もう少し細かな特徴でいえば、10代では、男女ともに、スノーボードへの関心が高いが、20代で大きく変化が起こる。女性は、30代以降になると、スキー、スノーボードともに、冬のスポーツへの関心が大幅に薄れてしまっている。しかしながら、男性は30代、40代においてもスキーに対する潜在需要が潜在していると言える。これが個人単独での潜在的なスキー需要なのか、家族スキーをイメージしたスキーの潜在需要なのかは、この調査データでは明確にはならない。

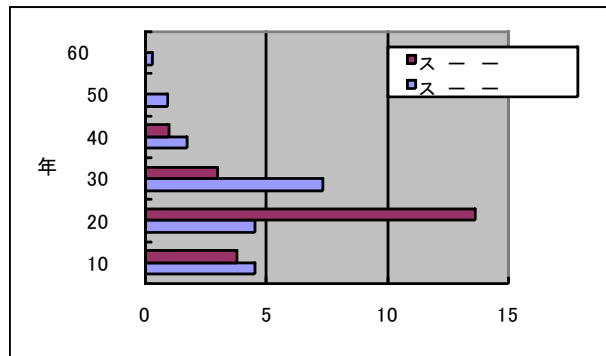


図10 2006年スキー・スノーボード参加率
(出所) レジャー白書 2007 21に基づき筆者作成

	ス	スー
10		2
20		
30		
40		
50		
60		
70		
80		
90		

図11. 2006年潜在需要(参加希望率-参加率)
(出所) レジャー白書 2007 p.16に基づき筆者作成

3.2. 北海道のスキー、スノーボード参加の状況

これに対して、北海道ではどうなっているかを、同じく2007レジャー白書のデータを使用して見てみる。これを見ると、いくつかの特徴的な傾向がうかがえる。全国との状況との比較、さらに、日本各地のスキー場エリアとの比較をまとめたのが図12.である。この表から読み取れる北海道のスキー、スノーボードへの参加率の特徴は次のようにまとめられる。

- (1) スノーボードでは、全国一位の参加率を誇るが、スキーでは、全国平均よりも低いという衝撃的な数字になっている。
- (2) 北関東、南関東、長野、山梨地区などの他のスキー場エリアとの比較において、スキーの参加率が大きく見劣りがしている。

- (3) スキーの参加率にスノーボードの参加率を合計しても、北海道でのスキー、スノーボードの参加率は、他のスキー可能エリアに比べて低い水準にある。

このデータが示す北海道地区でのスキーの参加率の低さは、前述した釧路地区での学校でのスキー研修の実績の低さからも、ある程度裏付けが取れるものであると言えよう³⁵。

	2453	108	73	70	119	300	130	149	210	73	36	48	152	70	208
スキー	5.5	4.6	12.3	8.6	5.9	9.7	4.6	5.4	7.1	2.7	13.9	4.2	7.2	2.9	3.9
スノーボード	3.8	7.4	4.1	4.3	5.0	2.3	1.5	4.0	5.2	1.4	5.6	4.2	3.9	-	4.8
合計	9.3	12.0	16.4	12.9	10.9	12.0	6.1	9.4	12.3	4.1	19.5	8.4	11.1	2.9	8.7

図12. 地域別活動参加率の特徴 (2006年)

(出所) 2007レジャー白書 p. 25に基づき、筆者作成

4. スポーツ、ツーリズム、文化の 3 要素の組み合わせによる地域活性化

4.1. 阿寒湖温泉の冬季の状況

阿寒湖温泉は有数の温泉観光地としての観光資源、各種の氷上のプログラム、阿寒湖アイヌコタンの伝統などを組み合わせた冬季の観光資源の開発とそのプロモーションによって、国内だけでなく、台湾を中心にした海外客の誘客を行っている。その意味では、スポーツとツーリズムと文化の 3 つの要素の組み合わせを用いた観光地と言えよう。しかしながら、この組み合わせの中に、釧路市国設阿寒湖畔スキー場は積極的に組み込まれておらず、スキー場単独事業体としての存続が危ぶまれる状況に至っている。特に、阿寒湖の氷上での活動は、さまざまなものが考案され、多くの観光客に楽しめるものとなっているのだが、氷上の活動以外は歩くスキー、スノーシューともに、活動が始まったばかりであり、大きな動きにはなっていない。氷上の活動を楽しむ観光客とスキー客とが別々の客層になっており、接点が少ない状況である。このことは逆に言えば、スポーツ、ツーリズム、文化の三つの要素が、有機的に新結合することで、地域の総合資源として取り組まれることによる新しい可能性があるとも言える。

4.2. 海外からの観光客

図 13. で示すように、阿寒湖温泉への海外からの観光客の 70%以上を台湾からの観光客が占める。彼らは、本格的な冬場のスポーツを堪能する客層ではなく、初めての雪や氷の

³⁵ 注 18 参照。2006 年度釧路市内のスキー研修実績 (小学校 : 6/34、中学校 : 5/18)

世界を体験する客層である。従来この客層に対するスキーの魅力を訴える活動は、やはり氷上での歩くスキーのみであり、積極的なスキー場への誘客は図られていなかった。これらの観光客は、本格的なスキー場にスキーそのものを楽しみに来日する観光客とは異なり、氷の上での体験、雪の上での体験を求める客であり、本格的なスポーツアスリートとは本質的に異なる客層である³⁶。

		宿泊	数	人			ン	ール	中	ア	ア	ー	口		
H	上	440,321	24,351	19,701	4,132	139	1	80	47	47	146	58			
17		406,589	36,738	29,080	267	3,660	3,268	76	252	56	46	33			
		846,910	61,089	48,781	4,399	3,799	3,269	156	299	103	192	91			
H	上	424,658	25,561	17,770	2,914	446	3,820	192	74	25	35	285			
18		394,547	33,477	25,567	163	2,825	4,214	129	476	33	34	36			
		819,205	59,038	43,337	3,077	3,271	8,034	321	550	58	69	321			

図13. 阿寒湖 宿泊人数
(出所) 釧路市阿寒町行政センターデータに基づき筆者作成

4.3. 冬の遊び場としての阿寒湖、阿寒湖畔スキー場のポジショニング

地元住民にとっても、釧路市国設阿寒湖畔スキー場は、リフトが設置される以前から親しんだ町のスキー場であり、彼らにとっての「冬の遊び場」そのものの存在であった³⁷。大手資本のスキー場とホテルという組み合わせでの開発ではなく、町の住民が楽しむスキー場であったものが、その後の人口降雪機の導入により、シーズンはじめの競技スキー場としての歴史も育んできたのである。近年利用率が下がってきたとはいえ、地元民にとっても特別な思いのスキー場であると言える。

これらの背景を受け、2007年度から、「冬の遊び場：阿寒湖」というキーワードに基づいて、冬の阿寒湖畔一帯をゆったり楽しんでもらうコンセプトの中で、スキー場を新たにポジショニングする方法を模索している。つまり、厳しい冬の中で、地域の人々が小さいころから親しんできた「冬の遊び場」としてのスキー場を、観光客も視野に置いた「冬の遊び場」として再構築しようという試みを始めたのである。その地域住民の遊び場の文化を他の観光資源と組み合わせる中で、観光客にも訴える方向性を模索しているのである。これを分かりやすく訴えるメッセージが「2泊3日できるレイクリゾート」の冬場のプログラム提案と言える。温泉だけでなく、氷上活動だけでなく、アイヌコタンだけではなく冬の阿寒の再発見の提案である。雪の遊び場も含め、厳しい自然の中で培われてきた地元の伝統文化としての「冬の遊び場」の阿寒湖並びにスキー場をじっくり楽しんでもらいたいという方向性を明確に出してきている。別の言い方をすれば、シーズン初期の本格的なアスリートスキーヤーを除いては、スキー場単独では観光客を呼べないスキー場の観光客への

³⁶ あいすランド阿寒並びにスキー場関係者は、現在過半数を占めている台湾観光客が雪に対して示す興味は、現在ではスキーではなく、スコープを持つての雪遊びであり、そりなどの遊具を使つての遊びであると証言している。残念ながら、これらの遊びは、あいすランド阿寒での収益には関係あるが、スキー場だけに限って言えば、一部機材のレンタル代（そりなど）、レストラン収入には結びつくが、スキー場の収益の中心であるリフト使用料には直結しない悩みがある。

³⁷ 注10参照。

利用を図る試みとも言える。今までスキーを除いたプログラムしか認知してこなかった観光客を対象に、周辺の素晴らしい自然環境と絶好のロケーションを生かした魅力ある遊び場を提供することで、結果として1泊ではなく、2泊できるリゾート地への変革を図っているのである。

4.4. 修学旅行生による冬の遊びの総合体験

前述したように、釧路市国設阿寒湖畔スキー場に、関東、特に神奈川を中心に修学旅行の一環として阿寒湖温泉を訪れる高校生がいるのだが、年間を通して修学旅行で北海道を訪れる地区別の比率と比較するとかなり異なった分布となっている。

出	行								
				中		中			
	0.0	0.8	16.5	0.3	57.2	5.2	0.0	16.2	3.4
	0.0	0.0	0.2	0.5	65.2	2.0	0.3	25.6	6.3
	13.7	2.1	0.4	1.3	18.8	2.7	0.7	45.7	14.3
中	12.4	0.0	1.6	6.9	6.1	2.8	0.2	53.7	16.3
	37.8	5.5	2.2	11.8	0.0	0.6	0.0	20.1	21.9
中	33.2	0.0	34.1	11.5	0.3	0.0	0.0	16.6	20.7
	30.3	0.0	34.1	11.5	0.3	0.0	0.0	11.5	12.2
	20.3	2.1	19.5	25.1	11.3	0.1	0.0	2.8	18.8
	17.0	1.7	7.4	6.9	19.3	1.9	0.3	30.5	14.8

図 14. 国内修学旅行の見学地と旅行先 (高校生)
(出所)(財)日本修学旅行協会「教育旅行白書 2007 年度版」に基づき、筆者作成

過去 11 年間で延べ 39 校が修学旅行の一環として釧路市国設阿寒湖畔スキー場を利用しているが、そのうち 21 校が神奈川、9 校が東京からの修学旅行生であるのに対し、図 14. で示すように、関東の高校の修学旅行生の場合、13.7%が北海道を訪れるのに過ぎない。近畿の高校生の場合は 37.8%、中国、四国からも 30%を超え、最南端の九州からも 20.3%の高校が、北海道への修学旅行を敢行しているのに対してである。このことを考えると、現在の釧路市国設阿寒湖畔スキー場での関東地区、特に神奈川県に偏った修学旅行でのスキー客の受け入れの分布は、過去における何らかの要因なり、プロモーションの結果なのかはともかく、重要な一つの事実として特筆されたいと考える。特に、スキー場でスキーを行った修学旅行生たちの阿寒湖温泉での他に印象に残った活動として、氷の上での様々な活動をあげていることから³⁸、彼らが、スキーはスキー、氷の上は氷の上と区別するのではなく、冬の活動の様々な「遊び」を同じように楽しんでいることが明確である。この点を意識した受け入れ地域側における「冬の遊び場」としての総合的なプログラム作りが必要と考えられる。

³⁸ 高校生に修学旅行生へのアンケートによる (釧路市阿寒町行政センターヒアリング)

4.5. 冬の遊び場のための具体的な活動

「冬の遊び場」の生活文化の具現化のために、大きく分けて 3 つの具体的な方向性を目指している。一つは、「冬の遊び場」としての空間利用の実現。二つ目は、スキー離れが激しい中で、スキーを楽しんでもらいたい若年者の誘導、つまり将来のスキー客の開拓に向けての活動。三つ目は、スキーの経験のない、もしくは雪になじみのない超初心者に対しても「遊び場」として楽しめるスキー場としての魅力を上げ、一般観光客を含めたより多くの人にスキー場で楽しんでもらおうという活動である。この方向性を住民レベルで確認して様々な活動を開始している。具体的には、この 3 つの方向性の確認とそれを実現していくための活動を企画・運営していくために、2007 年 10 月に、「阿寒湖畔スキー場活性化委員会」³⁹が形成され、行政、観光協会、商店街、飲食店、宿泊業者、ガイドなどの地元住民を巻き込んでの議論が開始された。さらに委員会メンバーが中心となったボランティア組織による具体的な取り組みが、2007 年のシーズンから開始されている。それらの結果としての 2007 年度の新しい活動の主なものをあげてみる⁴⁰。

- (1) 冬の遊び場としての空間利用の実現。ロッジ前のスペースに「キッズパーク」を設置し、高さ 3 m の巨大「雪だるま」を設置。
- (2) ソリを貸し出すことで、スキーをしなくてもスキー場で遊ぶことができる「遊び場」空間を作り上げる。親子連れの利用客が楽しめる全長 50m、幅 10m のソリ用のコースを作成。スキー経験の全くない海外からの観光客も意識した空間づくりである。
- (3) レストラン売店に、ケーキなど手軽に楽しめるメニューを追加。なお、地域メニューとして阿寒湖温泉で楽しむことができるエゾシカ丼もスキー場で提供できるようにした。
- (4) 若年層の誘導：将来のスキー客の開拓に向け「キッズデー」を設け、その日には、中学生以下に対しリフトを無料で開放。
- (5) 初心者用のスキー学校の開催日拡大、スキー試乗会の実施。スノーデー、バレンタインデー、ホワイトデー、レディースデーの企画、実施。
- (6) 修学旅行生を対象にしたアンケートを実施し、2008 年度以降の修学旅行生の増加のための対策の検討開始。
- (7) 遊び場としてのスキー場利用として、冬の遊び場グッズの展示やスノーシューのツアーや講習など、アウトドアでの楽しく健康的な遊びの提案。
- (8) 調理実習なども行い、アウトドア料理を楽しめるような活動の実施。
- (9) 仮装コンテストの実施、など。

³⁹ 阿寒観光協会、阿寒町観光振興公社、阿寒観光汽船、地元商店街、飲食店、宿泊業者、ネイチャーガイドなどの 21 名で組織され、釧路市阿寒町行政センターが事務局となっている。

⁴⁰ 第 6 回地域のスキー場の活性化に関する検討委員会資料（2008 年 3 月）に基づき、行政センターのヒアリングで確認。

2007年の10月23日に組織された「阿寒湖畔スキー場活性化委員会」が中心になり、上記のような活動を12月頭からのシーズンに向けて実現したというのは、短期間での取り組みということを考えると驚くべきことである。上記の様々なプログラムは活性化委員会でも検討され、実施に関しては活性化委員会を中心とした地元のボランティア活動で実行されたものである。キッズパークの雪像や、雪だるまも、もちろんボランティアの手作りである。これらのイベントの後には委員会での反省会が行われ、より良いプログラムにしていく方法が議論されている。多くの地域の関係者が、地元のスキー場の継続的な運営について、真剣に議論を行うだけでなく、その実施と反省まで含めた取り組みを始めたのである。直接的にスキー場の収益に貢献しないいくつかのプログラムも含めて⁴¹、「冬の遊び場」としてのスキー場の活性化対策が町全体の活性化の活動の一環であるという認識のもとに開始されたのである。

特に、それ以前にスキー場がまちづくり活動や、一般的な観光プログラムの中に具体的に組み入れていなかった状況の中で、この短期間の中で、スキー場の経営問題がきっかけとなり、地元住民による自発的な活動の中で意見が集約され、実行に至ったということを考えるとなおさらである。それだけスキー場の抱えた問題の大きさと地域住民にとっての地元のスキー場への思いが特別なものであったとも言えよう。これらの委員会活動並びに実施におけるボランティアの参加数は、この短期間において約300人日⁴²と計算されている。もちろん、委員会の中で提案されたが、初年度で実現しなかったアイデアもあるし、修学旅行生への対応などについては、今後の対応として残されていることも事実である。

5. 2007年度の来場者、リフト輸送人員の変化

10月23日の委員会の設置以後、委員会での短期間の議論から始まり12月から実施した活動によって、12月から3月までの短期間に直接どれだけの効果があったのかを判断することは極めて困難である。また、数字だけで判断すべきでないであろう。実績には、天候、景気などの他の要因も影響があるため、その解釈には注意を払う必要もある。これらの限界を認識したうえで、2007年度の数字を2006年度の比較において見てみよう⁴³。

	2007年度	2006年度	前年比
前年比来場者数	39,484	32,767	120%
リフト輸送人員	230,324	191,141	120%
売上額は、前年比約14%増			

⁴¹ 注36参照。

⁴² 釧路市阿寒町行政センターでのヒアリング（2008年9月）。例えば雪像作りで20人が二日間、延べ40人日の計算。

⁴³ 釧路市阿寒町行政センターデータ（2008年9月）

上記のように、来場者数、リフト輸送人員ともに、長期低下傾向のつづく全国並びに北海道のスキー場運営の中で、2007 年度の釧路市国設阿寒湖畔スキー場の実績は、阿寒湖温泉の関係者の努力に報いる数字が上がっており、今後の継続的な活動に向けて関係者に自信と勇気を与えるものとなっている。しかしながら、この数字そのものよりも重要な点は、これらの様々なスキー場に関わる活動を行うことで、地域の住民が楽しめたと認識している点である⁴⁴。この楽しめたという実感のもとに、2008 年度はさらにより良いプログラムに挑戦しようと盛り上がっているのである。

6. 今後の課題

2007 年度の活動は、10 月の活性化委員会の設置後から 12 月のスキーシーズンに向けて、短期間の中で実施されたものであり、アイデア通りには実行できなかったものや、天候によって、中止、変更を余儀なくされたものもある⁴⁵。また、これらの活動が、中・長期的に、スキー場への誘客、阿寒湖温泉全体への誘客、観光客の消費動向にどのような影響を与えるのかの判断を行うには、今しばらくの時間が必要であろう。そのうえで、あえて今後の課題を考えてみると、下記の課題が残っていると言えるだろう。

- (1) 高いモチベーションのもとに始まった活性化委員会と、その延長としてのボランティアの活動を継続的に運営・支援していくための仕掛けの必要性。ともすると、最初の 1-2 年は続けられるが、それを継続的に続けていくためには、どのような仕掛けが必要なのか、他地域のボランティア活動の研究が必要になるであろう。
- (2) キッズデーなどにより、地元の子供たちへの浸透が図られつつあるが、より広域での釧路市阿寒湖畔スキー場への誘客の検討策。特に釧路市内全域まで視野に入れた、小中学校全般に対するスキー研修などの仕掛けづくり⁴⁶。意外に低い北海道全体のスキー参加率をあげるための、北海道全体でのスキー研修の取組みなどもこの課題に含まれるであろう。
- (3) 修学旅行生への積極的な取り組み。関東地区、特に神奈川に偏った修学旅行生のスキー客がどのような背景なのかの分析とともに、他の地域、特に、北海道全体への高校生の修学旅行の始発地としてインパクトの高い近畿圏へのプロモーションの是非の検討。特にスキーだけでなく、氷上の活動、アイヌコタンの歴史など、北海道の文化的歴史教育なども含めた全体学習を提供できうるかどうかの可能性の検討⁴⁷。

⁴⁴ このことは、事務局である行政センター、主要メンバーである観光協会ともに、強く述べているメッセージである。(2008 年 9 月ヒアリング)

⁴⁵ 雪上車でのスキー場からの阿寒湖見学企画は、安全対策上実施できなかった。また、夜間での活動も、想像以上の体感気温の厳しさで実現できないものがあつた。(釧路市阿寒町行政センターヒアリング)

⁴⁶ 注 18 参照。2006 年の釧路市内でのスキー研修は、34 の小学校のうち 6 校、18 の中学校のうち 5 校のみで実施。

⁴⁷ 観光協会が中心になり、修学旅行関係者との協議を行っているが、学習旅行の性格も含め、修学旅行自

- (4) 台湾に偏った海外観光客の広がり。雪・氷に対する特別な思いのある台湾客への「遊び場」としての提供が可能であるならば、香港、シンガポール、中国本土の上海、シンセンなどの沿岸部の裕福なエリアへのプロモーションが可能なのかの検討⁴⁸。
- (5) 従来、阿寒湖の観光資源としては、道東観光の中継地としての利点を活かした温泉が中心にプロモーションがされてきたが、阿寒国立公園内の国有林、さらには前田一步園財団が保護・管理に努めてきた森林自然資源についての利活用の検討。

自然環境資源に関して追加コメントを行なう。2002 年にできた阿寒湖畔エコミュージアムセンターや、民間のネイチャーガイドなどの活動が小規模に展開されてきているが、これらの潜在的な活用が、温泉文化との関係で阿寒湖地域のスポーツ、ツーリズム、文化の文脈でどのように戦略化されていくかは、今後の課題と言えよう。2008 年 9 月の筆者の阿寒訪問時には、前田一步園財団の関係者と温泉街の宿泊施設オーナーとが共同して森林地帯に入り、森林の利活用に関する現地調査を行っている時でもあった。本格的な登山希望者から中級者のトレッキング、さらには初心者のハイキングまでを意識して、どのように森林の利活用ができるかを検討するための、地元の有志による現地調査と議論が開始されたばかりの状況である。北海道で最も歴史のある国立公園に指定されて以来の自然保護の歴史、前田一步園財団による管理・維持という恵まれた自然保護区内での広大な森林・山岳地帯を再評価し、今まで温泉資源に偏っていた見方に変革を起こす機運が起きているのである。阿寒湖一帯を形成してきた自然環境を活かしたアウトドアの拠点としての活性化を探る試みがなされつつある。

おわりに

バブル期に各地において大手資本による大規模なスキー場と宿泊施設の開発が進んだ。その後のバブルの崩壊、さらにレジャー活動の多様化、スキー離れが進む中で、小規模スキー場の経営が厳しい状況にあることには変わりがない。2007 年に釧路市国設阿寒湖畔スキー場で開始された新しい活動の多くは、リフト収入に大きく依存するスキー場経営には直接的に結びつかないものが数多くある。しかしながら、阿寒湖温泉における新しい住民活動は、単にスキー場の経営のためという問題意識を超えたものであることは明白である。

地元住民が育ち、慣れ親しんできた生活・遊びの場としてのスキー場の存続を、まちの最重要産業である観光との組み合わせによる相乗効果を図っていこうという方針は、極めて意欲的である。別の見方をすれば、スキー場単独での採算の観点から、スキー場が廃止

体の変化への対応を含め検討を行っている（観光協会ヒアリング：2008 年 9 月）

⁴⁸ 雪・氷への素朴な憧れを狙う観光客（台湾、香港など）だけではなく、本格的なスキー客として、近年スキーに対する関心が急速に高まっている韓国のスキー見込み客へのアピールを考え、観光協会をはじめ関係者が 2008 年に調査と PR の目的で訪韓。（観光協会ヒアリング：2008 年 9 月）。

に追い込まれるようなことが起きた場合、阿寒湖温泉の地域住民にとっての阿寒湖温泉での生活にどういった影響があるのだろうか。年間を通じた生活文化の一つの場としてスキー場を考えた場合、阿寒湖畔温泉での取り組みは、持続可能な生活文化をどう維持していくか、育成していくかの活動であるとも言える。また、活性化委員会での議論、その後のボランティア活動は、地元住民の阿寒湖温泉に生まれ育ったことのアイデンティティの確認故に起こった活動とも言えよう。まさしく、石森秀三がいう内発的意志に基づく自律的な観光活動への取り組み例と言える（石森：9）。

地域の複数の資源を有機的に新結合することは、単独の要素資源の足し算ではなく、より大きな相乗効果を狙うことである。阿寒湖温泉が目指している「スポーツ」、「ツーリズム」、「文化」の 3 つの要素を組み合わせる試みは、これまで以上の地域の競争力と磁力を確立しようという狙いでもある。この地域の生活文化まで取り組んだ新しい地域戦略並びに観光戦略は、将来に向かってのツーリズム・イノベーションとも呼べよう。

過去における阿寒湖温泉の歴史においても、「まりも祭り」が、「マリモは阿寒共有の財産である」（煎本 2001：325）という意識のもとに、大自然の恵みに対する感謝と自然保護を目的に開始され、50 年もの間継続されてきたのは、スポーツの観点こそないものの、阿寒湖一帯の自然に対する伝統とツーリズムの経済効果を融合させた新しい地域の活動であった。自然への感謝に基づくアイヌ文化の伝承によるツーリズム・イノベーションが起こった地域なのである。

阿寒湖温泉での 2007 年度の活動は、まだまだ実験的な段階であり、今後の議論の中で、さらに変革が起きるであろう。これらの新しい活動の中には、トライ・アンド・エラーの結果、中止されるものもあるだろう。模様替えを行って新しい内容を伴ったものとして開始されるものも出てくるだろう。しかしながら、最も大事なことは、これらの活動の中でどの活動が最も有効であるかということではない。これまで、スキー場の運営は市（行政）に任せられ、スキー場単独での事業運営が模索されてきた。住民の参画はスキー場利用者としてのみであった。住民に限られた利用しか行ってこなかった地域資源に対し、自らが主体となって、地域の活性化のフレームワークのなかで、一層の利活用を考えようになった意識の変化・変革こそが大事なのである。

地域の住民が生活の基盤としてきた地域の歴史、自分たちの暮らし方、小さいころからの遊びの文化・伝統と、市が置かれている財政問題を含めた課題、さらには海外関係の動向までを情報共有・理解しようと努力しているのである。これらの情報共有の上で、地域の将来課題の解決に向けて、スポーツ、ツーリズム、文化の 3 つの要素の組み合わせ（新結合）を模索していることにこそ価値があるのである。地域の持続的な発展に取り組もうという住民の内発的な意志による変革の意識と行動にこそ本当の意義がある。日本各地の大規模温泉街が厳しい状況にある中で、この地域住民の取り組み姿勢が、阿寒湖温泉の将来の新しい方向付けの核になることを期待しておわりとしたい。

インタビューリスト（組織名のみ）

阿寒アイヌ工芸協同組合

阿寒湖漁業協同組合

阿寒湖畔エコミュージアムセンター

阿寒湖温泉旅館組合

北海道運輸局企画観光部

釧路市阿寒町行政センター 観光振興課

まりも倶楽部

NPO 法人 阿寒観光協会まちづくり推進機構

東邦館

有限会社 阿寒ネイチャーセンター

財団法人 前田一歩園財団

財団法人 日本交通公社 研究調査部

参考文献

- あいすランド阿寒・フィッシングランド阿寒HP
<http://www17.plala.or.jp/mystic-lake/> (2008.9.28 アクセス)
- 阿寒アイヌ工芸協同組合HP
<http://www.marimo.or.jp/~akanainu/> (2008.9.17 アクセス)
- 阿寒湖畔エコミュージアムHP
<http://business4.plala.or.jp/akan-eco/index.htm> (2008.9.30 アクセス)
- 独立行政法人経済産業研究所
2003「W杯開催後の事後検証-開催を契機にした地域振興」(2003)
- 平澤隆二
2005「個人から見たアイヌ観・アイヌ民族としての私個人」
<http://www.frpac.or.jp/rst/sem/sem1716.pdf#search='平澤隆二'> pp.99-102
(2008.9.17 アクセス)
- 煎本孝
2001「まりも祭りの創造…アイヌの帰属性と民族的共生」『民族学研究』Vol.66, No3
pp.320-343
- 石森秀三
2001「21世紀における自律的観光の可能性」『エコツーリズムの総合的研究』
国立民族学博物館 pp5-14.
- 国土交通省・北海道運輸
2007 第4回スキー場活性化委員会資料 (2007.9.19)
2008 第6回スキー場活性化委員会資料 (2008.3.26)
- 釧路市阿寒町行政センターHP
<http://www.city.kushiro.hokkaido.jp/icity/browser?ActionCode=content&ContentID=1185844166226&SiteID=0> (2008.9.28 アクセス)
<http://www.city.kushiro.hokkaido.jp/www/contents/1185434622344/html/common/other/47f4735e008.jpg> (2008.9.28 アクセス)
- NPO 法人阿寒観光協会まちづくり推進機構
2005『阿寒湖温泉再生プラン2010』第二期計画概要版、並びにHP
<http://www.lake-akan.com/access/index.html> (2008.9.28 アクセス)
- 社団法人日本ナショナル・トラスト協会資料
<http://www.ntrust.or.jp/gaiyo/gaiyo.html> (2008.9.28 アクセス)
- The World Tourism Organization and International Olympic Committee
2001『Sports & Tourism, 2001』
- 有限会社阿寒ネイチャーセンターHP
<http://www.akan.co.jp/> (2008.9.30 アクセス)
- 財団法人前田一步園財団 カタログ、並びにHP
<http://www.ippoan.or.jp/naritatsil.htm> (2008.9.17 アクセス)

北海道大学観光学高等研究センター
観光創造研究 No.3

発行日 2008 年 10 月 16 日

発行：

北海道大学観光学高等研究センター

〒060-0817 北海道札幌市北区北 17 条西 8 丁目

Center for Advanced Tourism Studies, Hokkaido University

N17, W8, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido, 060-0817, JAPAN

表紙デザイン：

©Takayoshi Yamamura 2007

★ Center for Advanced Tourism Studies ★

